北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要　Bulletin of Ainu Culture Research Center, Hokkaido Museum 8: 1-19, 2023

論　文

アイヌ語静内方言の存在型アスペクト
―沙流・千歳方言との比較から―

吉川佳見

目次
1　はじめに
2　アイヌ語のアスペクトについての先行研究
2-1　沙流・千歳方言
2-1-1　kor an と wa an
2-1-2　kane an
2-1-3　hine an
2-2　静内方言
3　本論
3-1　kane an
3-2　wa an と hine an
4　おわりに

Key Words　アイヌ語（Ainu language）、アスペクト（Aspect）、存在動詞（Existential verb）

1　はじめに

アイヌ語には文法的テンスはなく、アスペクト形式の使用も義務的ではないが、アスペクト的な意味を表現する様々な形式がある。これまで、その用法について主に記述されてきたのは、日本語ではテイル／テアル形でしばしば訳されるような、「動詞（句）＋接続助詞＋存在動詞an（複数形oka）」の形式である。本稿筆者は吉川（2021a）において、この形式を「存在型アスペクト形式」と位置づけた上で、沙流・千歳方言のkor an、wa an、kane an、hine anのそれぞれの用法について記述した。また、吉川（2021b）では静内方言のkane anとwa anの用法について予備的な調査を行った。

本稿では、吉川（2021b）からデータを増やし、アイヌ語静内方言の存在型アスペクト形式 kane an、wa an、hine an（複数形はそれぞれkane oka、wa oka（y）、hine oka）[(1)] の用法について、沙流・千歳方言と比較しつつ論じた。その結果、静内方言のkane anが沙流・千歳方言のkor anのみでなくkane anにも相当する場合があることが複数例によって示された。wa an、hine anについては、脱アスペクト的な用法が静内方言にもあることが示された。

なお、用例は既存の公刊資料、Webサイトで公開済みの音声資料、辞書、文法書から収集した。用例の日本語訳は原則原典通りとするが、本論文筆者によって補足をする場合は、＜＞に入れて訳文中に記す。グロスは原則本稿筆者によって付す。韻文の物語の行境界は「／」（全角スラッシュ）で示す。引用に際して改変した表記の誤りはすべて本稿筆者に帰する。

2　アイヌ語のアスペクトについての先行研究

2-1 沙流・千歳方言

2-1-1 kor anとwa an

沙流方言と千歳方言において、これまでアスペクト研究の中核になってきた形式がkor an、wa anである。沙流方言の接続助詞korは、「～しながら、～するとき」というように、2つ事象の同時進行を表す（田村1988a：55）。また、接続助詞waは、「二つの動詞句をつないで一まとまりのことがらとしてまとめる働き（田村1996：821）」をし、「～して」と訳されることが多い。存在動詞anは「ある、いる、なる」といった意味を表す。以上については千歳方言においても同様である。

アスペクトという観点からアイヌ語の動詞を分類し

吉川佳見：北海道博物館　アイヌ民族文化研究センター　アイヌ文化研究グループ
（1）以降、特にことわりがない限り、それぞれkane an、wa an、hine anの形で代表させる。

た場合、「状態性動詞」と「非状態性動詞」とに大別されるという解釈がある（知里1973［1942］、中川1981）。中川（1981）によると、状態性動詞は、pirka「良い」、poro「大きい」等いわゆる日本語の形容詞にあたるものや、eraman「わかる、知っている」、an「ある、いる、なる」、ne「～である、～になる」などの動詞であり、「単独で＜静的な状態＞を表わし得る（中川1981：132）」動詞である。一方、非状態性動詞はそれを表し得ない動詞である。

非状態性動詞に関して、沙流方言や千歳方言においては、例（1）のように動作のみを表す動詞にkor anが付いた場合は動作継続を表す。動作のみを表す動詞とwa anは基本的には共起しない。変化を表す動詞にkor anが付いた場合は変化の進行過程（例（2））を表し、wa anが付いた場合は変化の結果の状態（例（3））を表す（金田一（1931）、知里（1974［1936］, 1973［1942］）、田村（1960, 1972, 1988a）、中川（1981）、佐藤（2006, 2007a, 2007b）などを参照）。

（1）kusta　hunna　tek　suyesuye　kor　an.
対岸で　誰か　手　～を振る　て　いる.SG
対岸で誰かが手を振っている
（佐藤2006：53）

（2）mokor　kor　an.
眠る　て　いる.SG
眠っている（眠りかかっている）
（田村1972：153）

（3）mokor　wa　an.
眠る　て　いる.SG
眠っている（すでに眠りについてしまっている）
（田村1972：153）

また、田村（1988a）によってkor anの習慣的用法が報告されている。（例（4））

（4）nen　ne　yakka　sapaha　kunnere
誰　COP　ても　頭　～を黒く染める
kor　oka.
て　いる.PL
だれでも頭を黒くそめている
（田村1988a：55）

wa anに関して、他動詞では、waの直前の動詞の主格の人称がanの主格の人称と一致する場合と、waの直前の動詞の目的格の人称がanの主格の人称と一致する場合がある。例（5）では、hok「～を買う」とanの主格人称接辞はどちらもk(u)＝で、一人称単数である。例（6）では、anの主格人称接辞はゼロ（三人称）で、hokの目的語であるtonoto「酒」がanの主語になっている。[(2)]

（5）sake　ku＝hok　wa　k＝an　na
酒　1SG.A＝～を買う　て　1SG.S＝ある.SG　FP
en＝kosinewe　yan.
1SG.O＝～のところへ遊びに行く　POL
お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
（中川1981：133）

（6）tonoto　ku＝hok　wa　an　na
酒　1SG.A＝～を買う　て　ある.SG　FP
en＝kosinewe.
1SG.O＝～のところへ遊びに行く
お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
（中川1981：133）

状態性動詞、すなわち「単独で＜静的な状態＞を表わし得る（中川1981：132）」動詞にkor anが付いた場合は、変化の進行過程を表すことがある。例（7）では、poro「大きい、大きくなる」にkor anが続いており、川が「大きくなりつつある（＝水が増えつつある）」という様子が表されている。

（2）例（5）（6）は、「お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい」という日本語文を、別々のアイヌ語話者が訳したものである。

(7) pet　poro　kor　an.
川　大きい　て　いる.SG
川が増水している
（佐藤2007：44）

「状態性動詞＋wa an」については、例（8）のように変化の結果継続（ここでは、「高くなる」という変化）を表すことがある。

(8) tane　kuca　okari　ne　yakka
今　狩小屋　まわり　COP　でも
mun　ri　wa　an　hi　kusu
草　高い　て　ある　こと　ので
今は狩小屋のまわりであっても草が伸びていた＜lit. 高くなっていた＞ので
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0237UT_35301AP）

また、例（9）のように、存在動詞an（＝状態性動詞）に wa anが付いた場合に、存在の一時性を表すという現象がみられる（佐藤2007a）。つまり、「「存在」といっても、「たまたま一時的にそこにいた／あった」（今後もそこにある／いるかどうかは不確実）という意味（佐藤2007a：48）」を表していることになる。

(9) ku＝nimu　akusu　rik　ta　kinasutunkur
1SG.S＝木に登る　すると　上　に　ヘビ
an　wa　an.
いる.SG　て　いる.SG
私が木に登ったら上にヘビがいた。
（佐藤2007a：47）

このan wa anの用例について佐藤（2007a）は「wa anが存在動詞のような本来恒常的な状態を表す動詞と共に用いられた場合は、「一時的な状態」を表すのではないか（佐藤2007a：47-48）」と述べている。この見解が例（8）のような用例にも当てはまるとすれば、例（8）は高くなるという変化の結果継続を表すと同時に、草が高くなっているという一時的な状態も表すと解釈できる。

ここまでをまとめれば、状態性動詞においては、kor anは変化の進行過程、wa anは変化の結果継続を表し、「非状態性動詞＋kor an / wa an」の場合と同様の対立をみせることになる。

しかし、例（10）のように「状態性動詞＋wa an」が恒常的な性質を表すような場合に用いられることもある。例（10）は一時性として解釈することはできず、動詞kor単独の場合と意味的な差があるのかどうか判断できない。

(10) aynu　opitta　honihi　kor　wa　okay　pe
人間　皆　腹　～を持つ　て　いる.PL　もの
ne　wa.
COP　FP
‘ Human beings all have a belly. ’
（Sato1997：150）

また、「状態性動詞＋kor an」が変化の進行の過程を表しているかどうか定かではない例もある。例（11）はa＝kor humi「私たちの気持ち、感じ」がpirka「良い」という状態でoka＝an「私たちは暮らしていた」ということであり、このような場合、動詞oka「いる（複）」が意味上本動詞として解釈され、「a＝kor humi pirka」はその付帯状況となっている。つまり、「接続助詞＋補助動詞的なan」のアスペクト形式（構文）の習慣的用法であると解釈することも、文同士の接続であると分析してanを本動詞的に解釈することもできる。（吉川2021a：48-50）

(11) a＝kor　humi　pirka　kor　oka＝an
4.A＝～を持つ　感じ　良い　て　いる.PL＝4S
ayne
あげく
気持ちよく私たちは暮らし＜lit. ?気持ちよくていた／?気持ちよくていながら暮らしたあげく＞
（千葉大学編2015a：211）

kor an、wa anという形式でありながらもアスペクトとして分析することが困難であるという問題は状態性動詞の用例に限ったことではなく、アイヌ語の存在型アスペクト形式全体の問題である。たとえば次の例（12）（13）は、どちらも動詞ramu「～を思う」に「kor oka」が後続し、「思う」という動作の継続が表されているが、例（12）が「思っていた」と訳されているのに対し、例（13）は「思って暮らしていた」のようにokaが「暮らす」という意味で訳されている。これは訳の仕方の問題というわけではなく、「暮らす」のような訳出を許す理由として、存在型アスペクト形式の中の存在動詞an自体が、人称標示を必要とするものだという事情がある[3]。つまり、日本語のテイル（テアル）形のイル（アル）という存在動詞が高度に文法化されているのに対し、アイヌ語のanは具体的な存在の意味を保持している。接続助詞の前の動詞に重点を置いてアスペクト的に解釈する（例（12））か、後ろの動詞に重点を置いて、前の動詞の動作を付帯状況として解釈する（例（13））かは随意的なものである。

（12）sine tuyorop　a＝ne　humi　ne　kunak
一つ腹　4.A＝COP　感じ　COP　ように
a＝ramu　kor　oka＝an　a　p
4.A＝～を思う　て　いる.PL＝4.S　た　だが
一つ腹に生まれた者で私達はあると思っていたのに
（アイヌ無形文化伝承保存会編1983：123）

（13）tane　pakno　a＝unuhu　ne　kunak
今　まで　4.A＝母　COP　ように
a＝ramu　kor　oka＝an　korka
4.A＝～を思う　て　いる.PL＝4.S　けれど
今まで＜あの魔猫を＞母さんだと思って暮らしていたけれど
（アイヌ民族博物館編2015a：25）

さらに、接続助詞の前後の動詞で人称が異なることも珍しくない。次の例（14）では、動詞parooske「～を養う／～の食事の世話をする」の動作主は第三者である「女性」であり、oka「いる（anの複数形）」の動作主は話し手と女性の両者である。つまり、文字通りには「i＝parooske kor oka＝an」は「（女性が）私を養って、私たちは暮らしている」という意味になる。

（14）i＝parooske　kor　oka＝an　ayne
4.O＝～の食事の世話をする　て　いる.PL＝4.S　あげく
a＝kopokor　ka　ki.
4.A＝～との間に子が生まれる　も　する
＜女性が＞私を養ってくれていると＜lit.私を養って、私たちは暮らしていると＞
子どもができました。
（アイヌ民族博物館編2015b：164）

以上のように、kor an、wa anはアスペクト形式として扱われてテイル／テアル形で訳されることが多いものの、実際には、文法的にも意味的にも一部でアスペクト的解釈を許す場合があるにすぎないという問題がある。

このような問題を踏まえつつ、吉川（2021a）では、状態性動詞の場合、その動詞を限界的に捉えるかどうかによってアスペクト的な意味が変化すると考えた。限界性が問題となる場合、kor anは変化の進行過程、wa anは変化の結果継続を表し、この対立は「非状態性動詞＋kor an / wa an」の場合と並行する。しかし、限界性が問題とならない場合、kor anについては動作の習慣性・多回性とみることも可能であり、脱アスペクト的用法として解釈することも可能である。wa anについても限界性が問題とならない場合は脱アスペクト的用法となる。

2-1-2 kane an

知里（1973［1942］：503）は、kane anがwa anと同じく「結果態（resultative aspect）[4]」をあらわす形式であるとしている。

kane単体としては、助動詞的用法、接続助詞的用法、副助詞的用法をもつ形式であり、既に多くの記述がなされている（金田一1931、知里1974［1936］，知里1973［1942］、田村1960、Refsing1986、中川1995a、佐藤2002など）。佐藤（2002）によれば、千歳方言のkaneの接続助詞的用法には「程度」を表すkaneの用例と、程度の形容とは考えにくい「継続、同時性」を表すkaneの用例がある。「程度」を表すkaneの用例のうち、「kane an」の構文をとっているものに

（3）ただし、方言によってはkor anに人称制限がある。
（4）「結果態」は知里（1973）が用いている用語であり、この場合の「態」はaspectを指している。

は例（15）がある。これに対し、程度の形容ではなく継続や同時性を示すkaneの用例のうち、kane an（またはkane oka）の用例には例（16）（17）が見られる。

（15）yayeaskay　kur　a-ne
独り立ちできる　人　INDEF.TR.SUBJ.-なる
kane　an-an　wa
ほど　いる-INDEF.INTR.SUBJ.　て[5]
独り立ちできる男に私はなった位であって
（佐藤2002：76-77）

（16）a-kor　mantari　ranma
INDEF.TR.SUBJ.-持つ　前掛け　やはり
ekutkor　kane　an　hine　ahun
締める　て　いる　て　入る[6]
私の前掛けをやはり締めて入って来た
（佐藤2002：77-78）

（17）piskan　apa　un　apa　un　kane　oka
両側　戸　付く　戸　付く　て　いる
wa　poronno　an　na
て　たくさん　ある　よ[7]
（廊下の）両側にずっと戸が付いていて（部屋が）たくさんあった
（佐藤2002：78）

結論として佐藤（2002）は、「kaneの基本的な用法は、ある基準までの到達を示す「程度」の接続助詞のようなものと考えるべきではないかと思われる。なお、おそらくはこの接続助詞的用法から助動詞的用法、副助詞的用法も説明可能では無いかと考えられる（佐藤2002：84）」と述べている。基本的には「程度」を表す形式であるkaneは、「主として文脈による語用論的な要因で、様々な程度を表すことができる（佐藤2002：84）」ものであり、例（16）（17）のkaneが表す継続や同時性の意味が「程度」から説明が可能である理由としては、「あるものの程度の叙述は、そのものに付随して同時的に存在する性質、状態を表すから（佐藤2002：84）」だとしている。そしてまた、kaneが「程度」という基本的な意味をもつことは、「日本語の「ほど」が「思ったほど」のように程度を表す一方で、「一万円ほど」のような婉曲的表現、「死ぬほど」のような強調的表現でも用いられることと軌を一にしている（佐藤2002：86）」と述べている。この記述はkane anの用例を含め、kaneそのものの性質を包括的に説明し得るものである。

本稿筆者は吉川（2021a）において、kane anがwa anと同様に変化の結果継続を表すことが先行研究で述べられていることをもとに、wa anとの差異の有無に注目しつつkane anの用法を検討した。結果、沙流・千歳方言のkane anが非状態性動詞と共起した場合は基本的に変化の結果継続を表すが、wa anほどの出現数は無く、kane anのほうが使用場面が限られることを確かめた。具体的には、主体の表情や、身体への接触を伴う所有物などを描写する際にkane anが用いられる例が散見された（例（18）～（21））。また、kane anが状態性動詞と共起する場合は、その状態性動詞が単独で用いられる場合と、意味的に大きく対立するものではなく、単なる状態を表している（例（22）（23））。

（18）mina　kane　an　wa　a　wa　an
笑う　て　いる.SG　て　坐る.SG　て　いる.SG
uske　un
ところ　に
笑って<lit. 笑っていて>座っているところに
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0159KM_34683ABP）

（19）kunne　kosonte　utomciwre　kunne　cipanup
黒い　小袖　～を身につける　黒い　鉢巻
epaunu　kane　an　kamuy　menoko
～を頭につける　て　いる.SG　神　女
ni　opes　ran　hine　ora
木　～に沿って　下りる.SG　て　それから
黒い着物をまとい、黒いかぶり物をした<lit. 鉢巻を頭に付けている>女神が木を伝って下りて来て
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0227UT_35298ABP）

（5）グロスは佐藤（2002）による。
（6）グロスは佐藤（2002）による。
（7）グロスは佐藤（2002）による。

(20) hure　kap　attus　mi　kane　an　kor
赤い　皮　樹皮衣　着る　て　いる.SG　て
hure　rek　tannere
赤い　髭　～を長くする
（夢に出てきたカムイは）赤いハルニレの樹皮衣を身にまとい＜lit. 着ていて＞、赤い髭を伸ばして
（千葉大学編2015b：2016）

(21) a＝wenpoutari　sapanum　takupi
4.A＝悪い息子たち　頭部　だけ
a＝ani　kane　an＝an　wa
4.A＝～を持つ　て　いる.SG＝4.S　て
私は極道息子たちの頭部だけを手に持っていました。
（田村1997：46）

(22) kewe　pon　kane　an　okkayo
体　小さい　て　いる.SG　男
nukunne　okkayo
顔が黒い　男
小柄な男＜lit. 体が小さい＞、顔色の小黒い男が
（平石2003：20）

(23) cekantoorsoye　kane　an
天に向かってそびえている　て　いる.SG
poro　nupuri　an　ruwe　ne
大きい　山　ある.SG　こと　COP
天を突いてそびえている大きな山がありました
（田村1988b：4）

wa anとkane anとの差異として、kane anの用例で特徴的なのは、kane anが用いられる箇所が物語中での定型句や常套表現にかかわる傾向にある点である。なかでも、先の例（18）のmina「笑う」の継続相ではkor anやwa anを取る例はあまり見られず、kane anを取る例が頻出しており、定型表現化していることがうかがえる[8]。また、たとえば先の例（19）（20）は物語中で神（カムイ）の装束について描写している箇所であるが、物語の聞き手はその装束によって何の神であるかを知ることができる。つまり、衣服などをただ身につけているだけでなく、それによって主体のキャラクター性のような属性が表される描写であり、また同時に、その主体を描写する常套表現となっている。

2-1-3 hine an

hine anは、知里（1973［1942］：503）ではwa anと同じく「結果態（resultative aspect）」の形式であるとされている。接続助詞hineは接続助詞wa同様、「～して」と訳される形式であるが、hineとwaの違いについて、田村（1996）は「日常会話では、前後の関係が密接で切り離せない場合、因果関係がある場合、前部が後部の方法を表す場合などには waが用いられ、一つの事が起こったことを言い、その後で次のことが起こったという表現をするときに hineが使われる、というような使い分けがある。（田村1996：190）」と記している。また中川（1995）も「前後の文がその順序で行なわれたことを示す。wa に比べると、前後の動作に因果関係や緊密性が少ない。（中川1995：331）」と記している。

wa anとhine anのアスペクト的な意味については、目立った差異は見られない。吉川（2021a） でhine anの用例中に多数見られたものは、コピュラ動詞ne「～である、～になる」に後続するパターンである。例（24）は物語冒頭、主人公が自らが何者であるかを語った部分である。散文説話ではこうした始まり方はごく一般的であり、「～ a＝ne hine an＝an　私は～である」という表現がよく用いられる。また、例（25）は、物語中盤で神が自分の素性を明かす場面である。ここでも同様に、「a＝ne hine an＝an」という表現が用いられることがある。wa anを用いた同様の表現（a＝ne wa an＝an）もあるが、どちらにしても、ne単独で用いる際とどのような違いがあるのか定かではない。

(8) 沙流方言辞典によれば、minaは「声を出して笑うことも、声を出さずにほほえむことも言う（田村1996：389）」。

(24) Tannesar　sekor　a=ye　kotan　or
タンネサル　と　4.A=～を言う 村　ところ
un　kur　a=ne　hine　an=an
～に住む　人　4.A=COP　て　いる.SG=4.S
pe　ne　hike
もの　COP　だが
タンネサルという村に住むのが私でした。
＜lit.私はタンネサルという村に住む人である者だが＞
（アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0201UT_35227AP）

(25) “tan　menoko,　asinuma　anakne　nep　aynu
この　女　PRN　TOP　何　人間
a=ne　ruwe　ka　somo　ne
4.A=COP　こと　も　NEG　COP
upascironnup　a=ne　hine　an=an
白狐　4.A=COP　て　いる.SG=4.S
ruwe　ne　a　p
こと　COP　た　だが
「これ、娘よ。私はどんな人間でもない。私は白狐の神であって
（平石2003：22-23）

(26) nep　e=kar　kane　e=an
何　2SG.A=～をする　て　2SG.S=いる.SG
ruwe　ta　an？　e=kar　pe
こと　Q　ある.SG　2SG.A=～をする　もの
ye！
～を言う
“What are you doing（right now）? Tell me what you do！（lit.: “your do-thing ）”
（Refsing1986：196）

(27) kes to an kor　ikarkar=an　kane　oka=an
毎日　刺繍をする=4.S　て　いる.PL=4.S
毎日私は刺繍をしていた
（奥田1995：147）

(28) a=kor　nispa　ni　senpir　ta　an
4.A=～を持つ　旦那　木　～の陰　に　いる.SG
wa　inkar　wa　an.
て　見る　て　いる.SG
“My husband was in hiding behind a tree and he was looking around. ”
（Refsing1986：194）

2-2 静内方言

静内方言では、これまでkane an、wa anがアスペクト的意味を表わす形式として記述されている（Refsing1986、奥田1995参照）。kaneは「後件が継続してあるいは繰り返して起きているあいだじゅう前件が継続していることを表す（奥田1995：147）」接続助詞であり、kane anの形式で「前件が進行しつつある過程あるいは習慣的に実現する状態を表す（奥田1995：147）」。waは前件と後件の時間的な継起関係や、前件が後件の理由になるなどの広い意味を持つ接続助詞であるが、wa anの形式では「前件の結果が継続していることを表す（奥田1995：144）」。つまり、静内方言のkane anは動作継続（例（26））や習慣的な動作（例（27））を表し、wa anは変化の結果継続（例（28））を表す形式であるとされる。これはそれぞれ、沙流・千歳方言のkor an、wa anの機能に相当する。

また、Refsing（1986）はkaneが状態動詞（stative verb）に後続した場合ついて、以下のように述べている。

After stative verbs kane indicates the circumstances or state, which form the background of the following sentence.

Ex.438. Toon　korsi　omap　wa,　ku　sanpe　wen
1　2　3　4　5　6　7
kane　ku　omap.
8　9　10
（1: that, 2: child. 3: love, 4: and, 5; I, 6: heart, 7: be bad, 8: -ing, 9: I, 10: love）
“Loving that child, I love her painfully much.”
（Refsing 1986：250）

Refsing（1986）のこの例文（Ex.438）について、佐藤（2002）は田村（1996）が挙げている下記の例文（29）と同種のものである可能性があると指摘している（佐藤2002：71）。つまり、Ex.438は「胸が苦しくなるほどにかわいく思う」という意味であり、静内方言のkaneと沙流方言のkaneの用法との共通性を指摘している。

（29）ku＝sanpe　ka　wen　kane
　　1SG.A＝心　も　悪い　ほど
　　a＝utari　　k＝esikarun.
　　4A＝同胞　1SG.A＝～が恋しい
　　気持ちも暗くなるほどに身内の者に会いたい。
　　（田村1996：274）

本稿筆者は吉川（2021b）において、静内方言のkane an、wa anが状態性動詞と共起した場合について若干例をもとに調査したが、次章では改めてその結果も含めて論じる。

また、hine anについてはこれまで静内方言ではアスペクト形式としては取り上げられてきていないが、静内方言でも接続助詞hineは用いられ、「前件がまず起り、次いで後件が起ることを表す（奥田1995：145）」か、もしくは「前件の状態で後件が実現することを表す（奥田1995：145）」。この点で、沙流・千歳方言のhineと大きな違いはなく、静内方言のhine anと沙流・千歳方言のhine anの用法も共通していると推測される。

3　本論

本章では、アイヌ語静内方言のkane an、wa an、hine anが表すアスペクト的意味について、沙流・千歳方言との差異に触れながら論じる。

今回の調査において、静内方言の存在型アスペクト形式がそれぞれ共起した動詞は、kane an/okaは300種、wa an/okaは192種、hine an/okaは43種となり、のべ用例数としてもkane an/okaが最多となった。

概略、wa anが表すアスペクト的意味については先行研究の記述通りとなり、hine anもwa anに近い意味を表すようであった。kane anについてはこれまで動作継続を表すのが定説であったが、今回の調査では沙流・千歳方言のkane anとの共通性を複数例によって確かめることができた。

本章ではまずkane anについて述べたのち、互いに同様のアスペクト的意味を表すwa anとhine anについて述べる。

3-1 kane an

今回収集したkane anの用例の大半は、先行研究により指摘されている用法に沿ったものであった。たとえばcis「泣く」やmoymoyke「動く、うごめく」などもっぱら動作を表す動詞は、kane anによってその動作の継続が表される（例（30）、例（31））。また、例（32）のように習慣的に繰り返される動作を表すこともある。変化動詞にkane anが接続した場合は変化の進行過程（例（33））、または習慣的な動作（例（34））を表す。

（30）ahup＝an　　akus　　a＝kor　　yupo
　　入る.PL＝4.S　すると　4.A＝～を持つ　兄
　　cis　kane　an
　　泣く　て　　いる.SG
　　家に入ると兄さんが泣いていました。
　　（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0018OS_34120AB）

（31）ne　　ni　kamuy　moymoyke　kane　an
　　その　木　神　　うごめく　　て　　いる.SG
　　その木の神はうごめいていました
　　（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0185OS_35002AB）

(32) kesto　an　konno　a=utari　utar　uekarpa
毎日　ある.SG　すると　4.A=同胞　たち　集まる.PL
wa　nina　utar　nina
て　薪取りをする　人々　薪取りをする
iuta　utar　iuta　kane　oka
ものを搗く　人々　ものを搗く　て　いる.PL
ruwe　ne　na
こと　COP　FP
毎日村人たちが集まって まき取りをする者はしているし 穀物を臼でつく者はついているのですよ。
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0110OS_34449A）

(33) hoskino　turep　an=se　hine
先に　オオウバユリ　4.A=～を背負う　て
a=kor　turesi　ios　san　kane
4.A=～を持つ　妹　後から　下りる.SG　て
an　a　p
いる.SG　た　だが
先に私がオオウバユリを背負って妹は後から山を下りてきていたのだけれど
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0035OS_34145A／34157A）

(34) an=siwto　utar　or　ta　ka
4.A=舅　たち　～のところ　に　も
sinewpa=an　wa　an=siwto　utar　ka
遊びに行く.PL=4.S　て　4.A=舅　たち　も
kasi an=oyki
（4.A=）～の面倒をみる
ekimne=an　wa　yuk　ka　kamuy　ka
山仕事にいく=4.S　て　鹿　も　熊　も
an=se　wa　cise　or　ta
4.A=～を背負う　て　家　～のところ　に
a=are　wa　oro wa　hosippa=an
4.A=～に置く　て　それから　帰る.PL=4.S
kane　oka=an　wa
て　いる.PL=4.S　て
義父母のところにも遊びに行って 義父母も私が養いました。
山に行ってシカもクマも運んで 義父母の家に置いてそれから家に帰る暮らしをして＜家に帰っていて＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0002OS_30006AB）

変化動詞のうち、kane anとwa anの両方と共起する動詞の場合は、①kane anで変化の進行過程、wa anで変化の結果継続を表す例（例（33）（再掲）と例（35））、②kane anで習慣的動作、wa anで変化の結果継続を表す例（例（34）（再掲）と例（36））があった。

(33)（再掲）
hoskino　turep　an=se　hine
先に　オオウバユリ　4.A=～を背負う　て
a=kor　turesi　ios　san　kane
4.A=～を持つ　妹　後から　下りる.SG　て
an　a　p
いる.SG　た　だが
先に私がオオウバユリを背負って妹は後から山を下りてきていたのだけれど
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0035OS_34145A／34157A）

(35) a=kor　tono　suy　i=eirpak
4.A=～を持つ　殿　また　4.O=～とともに
san　wa　an　wa
下りる.SG　て　いる.SG　て
殿様はまた私のところに下りて来て＜lit.下りていて＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0052OS_34161AB）

(34)（再掲）
an＝siwto　utar　or　ta　ka
4.A＝舅　たち　～のところ　に　も
sinewpa＝an　wa　an＝siwto　utar　ka
遊びに行く.PL＝4.S　て　4.A＝舅　たち　も
kasi an＝oyki
（4.A＝）～の面倒をみる
ekimne＝an　wa　yuk　ka　kamuy　ka
山仕事にいく＝4.S　て　鹿　も　熊　も
an＝se　wa　cise　or　ta
4.A＝～を背負う　て　家　～のところ　に
a＝are　wa　oro wa　hosippa＝an
4.A＝～に置く　て　それから　帰る.PL＝4.S
kane　oka＝an　wa
て　いる.PL＝4.S　て
義父母のところにも遊びに行って 義父母も私が養いました。山に行ってシカもクマも運んで 義父母の家に置いてそれから家に帰る暮らしをして＜家に帰っていて＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0002OS_30006AB）

(36) tane　an＝i＝turseka　ankeka[9]　sirki
今　4.A=4.O=～を落とす　～しそうになる　様子
isitoma＝an　kane　nani　cise　or　un
恐れる＝4.S　て　すぐ　家　～のところ　へ
hosippa＝an　wa　oka＝an
戻る.PL＝4.S　て　いる.PL＝4.S
今にも私は海に落ちてしまいそうな様子を恐れてすぐに家に戻ってきました。＜lit. 戻っていた＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0069OS_34181B／34182A）

「状態性動詞＋kane an」の場合にも、変化の進行過程を表していると解釈できる用例がある。本稿筆者は吉川（2021b）において、静内方言のkane an、wa anが状態性動詞と共起した場合について、若干例をもとに調査しており、その際には「状態性動詞＋kane an」のアスペクト的な意味のひとつに、変化の進行過程があることを指摘した（例（37）（38）（39））。例（37）は、「大きくなってきている（成長しつつある）」、例（38）は「もう大きくなってきている（成長しつつある）」、例（39）は涙の通った跡が「白くなりつつある」と解釈できる。

(37) tane　pakno　ka　poro　kane an　pe
今　まで　も　大きい　て　ある.SG　もの
これほど大きくなった＜lit. *大きくてある＞ものを
（トゥイタㇰ2：135）

(38) nea　hekaci　tane　poro　kane an　wa
その　男の子　今　大きい　て　ある.SG　て
apkas　wa
歩く　て
その男の子がもう大きくなってきて＜lit. *大きくてあって＞歩くようになり
（トゥイタㇰ2：169）

(39) raytekpake　cis　a　cis　a　oro
美しい女性　泣く　ITR　泣く　ITR　ところ
nupe　kus　hi　retar　kane an　hine
涙　通る　こと　白い　て　ある　て
とても美しい娘が、さんざん泣いて
その頬には涙の跡が白くついていて＜lit. *白くてあって／白くなっていて＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0030OS_34139B／34140A）

しかし、この3例は変化の結果継続とみることも可能であり、例（37）は「今まで（も）（これほどにも）大きくなっている」、例（38）は「もう大きくなっている」、例（39）は「白くなっている」とも解釈できる。kane anが変化の結果継続を表しているような例は非状態性動詞においても見られる（例（40）～（43））。

(9) 音声はankekaと聞こえるが、ankeoka「～しそうになる」か。

(40) aynu　payeka　uturu　moyre　p　ne
人間　歩き回る　間　遅い　もの　COP
a　noyne　apa　ne　uske　puray　ne　uske
た　ような　戸　COP　ところ　窓　COP　ところ
punkar　ukoetaye　kane　an
蔓　からみあう　て　いる.SG
人間が通りかかることがまれなようで戸のところや窓のところに木のつるが巻きついていました。
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0040OS_34150A/34150A）

(41) “<前略>･･･　itononte　wa　tokapracici　kane
乳をのませる　て　乳が垂れ下がる　て
an　ruwe　ne.”
いる.SGこと　COP
「<前略>･･･<親犬は>授乳しているので乳が垂れ下がっていましたよ」
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0011OS_34100AB）

(42) kunne　kosonte　mi　kane　an
黒い　小袖　～を着る　て　いる.SG
kamuy　ne　kus　kamuy　koraci　an
神　COP　ので　神　のように　ある.SG
acapo　ne　p　s...　mina　kane
おじさん　COP　もの　（言いさし）笑う　て
黒い着物を着た、神なので神のような姿をした年配の男性が笑いながら
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0044OS_34152AB）

(43) kamuy　ne　kus　kamuy　koraci　an
神　COP　ので　神　のように　ある.SG
kamuy　menoko　asir　sieca　kane
神　女　新しい　自分の髪を切る　て
an　hine
いる.SG　て
神なのでいかにも神らしい姿をした女神が髪は新たに切りそろえていて
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0011OS_34100AB）

また、例（44）～（48）は「状態性動詞＋kane an」の用例であるが、これらの例はkane anを用いない場合とアスペクト的意味の対立は見出しにくい。

(44) pon　kane　an　sikuma　ka　ta　rikip=an
小さい　て　ある.SG 峰　上　に　登る.PL=4.S
konno
と
小さい峰の上に登ると
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0030OS_34139B／34140A）

(45) kewe　pon　kane　an　nanu　hure　kane
体　小さいて　ある.SG　顔　赤い　て
an　eattukonna　apekes　koraci
ある.SGなんとまあ　燃えさし　～のような
nanuhu　hure　okkay
顔　赤い　男
体の小さい顔の赤い 何とまあ、火の燃えさしのような顔の赤い男が
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0068OS_34180AB）

(46) kuri　kunne　kane　an　okkaypo　ka
姿　黒い　て　ある.SG　若者　も
utarpake　siktumkonna　parse　kane
立派な男　目つき　燃える　て
色の黒い＜lit. *黒くてある＞若者のなかでも特に立派な若者、目の中が燃えているような人で
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0049OS_34158A）

（47）eattukonnaan　poro　ruwe　takne　kane　an
なんとまあ　大きい　太い　短い　て　ある.SG
wenkamuy　ne　hawan
悪神　COP　だった
何とまあ、大きくて太く短い悪神だったのだ
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0068OS_34180AB）

（48）ene　katupirka　p　a=kor　yupo
あのように　容姿がいい　もの　4.A=～を持つ　兄
ne　awa　sattek　a　sattek　ayne
COP　たのに　痩せる　ITR　痩せる　あげく
owse　pone　an　kane　an　wa
ただ　骨　ある.SG　て　ある.SG　て
あんなに容姿のいい兄であったのに
ひどくやせたあげくに骨ばかりになって
＜lit.ただ骨になっていて＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0035OS_34145A／34157A）

例（44）～（48）のような用例は、佐藤（2002）が千歳方言のkaneの用法で指摘したような、「程度」ないしは強調表現を表す用法だとみなすこともできる。先の例（44）であれば、「小さめの峰」という意味合いになる。また、例（48）のような例は、ひどく痩せてしまって「骨ばかり（骨だけ）」になってしまったという強調・誇張の表現になっている。しかし、次の例（49）（50）のような、継続や進行、強調・誇張表現とも解釈しにくい用例もある。

（49）ekoykaun　poro　pet　or　un
東の方へ　大きい　川　～のところ　へ
carkor　kane　an　nay　ooho
口がある　て　いる.SG　沢　深い
eattokonnaan　nay　oske　ekurok　kane
なんとまあ　沢　中　真っ黒だ　て
sirekurok　kane　siran
真っ暗だ　て　様子である
東の方へ大きな川（本流）に口がある支流が深くて、なんとまあ支流の中が真っ黒で、真っ暗な様子だった。
（AA研アイヌ語資料公開プロジェクト　織田ステノ「オタスッウン カッケマッ」）

（50）puyar　corpok　ta／
窓　下　に
a=utari　ne　kane　an　pe／
4.A=同胞　COP　て　いる.SG　もの
i=koiruska
4.O=～に怒る
窓の下で／私の仲間である者が／私を怒りつけ
（静内郷土史研究会編1985：158）

静内方言のkane anが動作継続、変化の進行過程、習慣的動作を表すという点では、先行研究から明らかになっているように、沙流・千歳方言のkor anに相当する表現であると言えるが、ここまでに述べたように、静内方言のkane anには、変化の結果継続を表しているように見える用例や、動詞単独の場合とのアスペクト的意味の対立が見いだせない用例もある。

沙流・千歳方言のkane anは基本的には変化の結果継続を表し、なかには属性を表していると解釈できるものがしばしば見られていたため、変化の結果継続から単なる状態や恒常性へと派生した可能性も考えられる。しかし、そうではない静内方言のkane anが恒常的意味を表すのは、元のアスペクト的意味からは離れたところにあり、沙流・千歳方言と同じようには考えにくい。また、静内方言においては、最も明確に現れているアスペクト対立がkane anとwa anであることを踏まえると、kane anが動作継続のみならず変化の結果継続も表すようになっているとは断定しにくい。

ちなみに、沙流・千歳方言のkane anの例で頻出する「mina kane an（笑っている）」という表現は、静内方言においても以下の例（51）のような形で複数例見られた。明らかに動作継続を表していると解釈できるkane anとは別に、常套表現として用いられるkane anが沙流・千歳方言など他方言の影響を受けて定着した可能性もあるが定かではない。

(51) kamuy menoko mina kane an hine hawki
神 女 笑う て いる.SG て 言う
haw ene an hi
声 このように ある.SG こと
女神が笑いながらいてこのように話しました。
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0011OS_34100AB）

3-2 wa anとhine an

wa anやhine anが非状態性動詞を取った場合については、おおよそ先行研究に違わぬ結果となった。「非状態性動詞＋wa an」では例（52）（53）のように主体や客体の変化の結果継続が表され、「非状態性動詞＋hine an」では例（54）（55）（56）のように主体の変化の結果継続が表されるのが基本のようであった。wa anもhine anも変化の結果継続を表すという点では、沙流・千歳方言におけるwa anとhine anとの関係と共通しているが、沙流・千歳方言のwa an・hine anが主体や客体の変化の結果継続を表す一方、今回の調査では静内方言のhine anには客体の変化の結果継続を表す用例は見られなかった。

(52) acapo ka cepkoyki kusu ek wa an
おじさん も 魚を捕る ために 来る て いる.SG
ruwe a＝nukar kane
様子 4.A＝～を見る て
おじさんも魚とりに来ていたのを私は見ながら
（アイヌ民族博物館編2001：106）

(53) kakenca or ta a＝racitkeka
着物かけ ～のところ に 4.A＝～をぶら下げる
wa an konno
て ある.SG すると
＜私は着物を＞着物掛けから下げてあると
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0068OS_34180AB）

(54) ne nitumam seturu kotukka hine
その 木の幹 背中 ～に～をくっつける て
sini hine an hine
休む て いる.SG て
その木の幹に背中をつけて休んでいて
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0185OS_35002AB）

(55) mokor＝an hine oka＝an akus
眠る＝4.S て いる.PL＝4.S すると
眠っていると
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0019OS_34120B）

(56) sipinpa＝an hine apesam ta rok＝an
身支度をする＝4.S て 炉端 に 座る.PL＝4.S
hine oka＝an konno
て いる.PL＝4.S すると
身支度をして火のそばに座っていると
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0030OS_34139B／34140A）

次に、「状態性動詞＋wa an」について、吉川（2021b）では以下の例（57）～（60）を挙げた。例（57）のan wa anについては、動作の一時性という解釈も可能であるが、例（58）（59）（60）については進行や継続の意味も一時性の意味も読み取れない。沙流・千歳方言の「状態性動詞＋wa an」においても同様の現象がある。

(57) ikia kamuy an wa an ayne
その 神 いる.SG て いる.SG あげく
その神がじっと座っていて＜lit. *いていて＞ついに
（トゥイタㇰ4：28）

(58) kanna kamuy or ta pon wa an
雷 神 ところ に 小さい て ある.SG
kur macihi ne e=an nankor
人 妻 COP 2.S=いる.SG だろう
ari an pe kus
と ある.SG もの ので
雷神のところの下の男の妻<lit. *小さくてある人>になるだろうということになったので
（アイヌ民話：146）

(59) aynu kotan ta soya kamuy kamuy mataki
人間 村 に 蜂 神 神 妹
e=ne wa e=an
2.A=COP て 2.S=いる.SG
人間の村の蜂神よ、おまえは妹神ですね。<lit. *おまえは妹神であってある>
（アイヌ民話：134）

(60) anoka anakne nep ka kamuy okay pe
PRN TOP 何 も 神 ある.PL もの
ne hike ketupe kamuy a=ne wa
COP だが ケトゥペ 神 4.A=COP て
oka=an hine
いる.PL=4.S て
私は他でもないケトゥペ神なのだ。<lit. *ケトゥペ神であってある>
（トゥイタク3：33）

用例数を増やした今回の調査では、pirka「良い、美しい」、wen「悪い」、kor「～を持つ（所有する）」katcak「見かけが悪い」などが「状態性動詞 wa okay pe」の構文で現れた（例（61）～（63））。

(61) pirka wa okay pe, sirit kor pe
良い て ある.PL もの 先祖 ～を持つ もの
icarpa sirusi ne an=se wa
先祖供養 印 COP 4.A=～を背負う て
良いもの、先祖のものを先祖供養の印として私は背負って
（AA研アイヌ語資料公開プロジェクト 織田ステノ「moyuk」）

(62) wen wa okay pe an=sitoma p
悪い て ある.PL もの 4.A=～を恐れる もの
oka konno a=tuymaokewe
いる.PL すると 4.A=～を遠くに追い払う
a=pakasnu
4.A=～を罰する
悪い者、恐ろしい者がいると遠くに追い払って罰していた
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0062OS_34172AB／34172A）

(63) a=kor ona utar kor wa okay pe
4.A=～を持つ 父 たち ～を持つ て いる.PL もの
katcak wa okay pe
見かけが悪い て ある.PL もの
an=cisekouhuyka
4.A=～を家とともに燃やす
父たちの持ち物は、見かけが悪い物は家と一緒に燃やして
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0064OS_34174AB／34175A）

例（61）にあるような「pirka wa okay pe」、例（62）にあるような「wen wa okay pe」は複数例みられたが、どの用例においても、前者は物質として良い物、後者は悪い心を持つ者という意味で用いられており、たとえば「wen wa okay pe」が「粗悪品」といったように物質に対して用いられるケースは見られなかった。また、例（63）の「kor wa okay pe」は、ほとんどの場合で財産としての所有物が表されており、沙流・千歳方言においても同様の例が多数見られる。このことから、「動詞wa okay pe」には定型句化している例があると考えられる。一方で、今回調査したなかでは、「wa okay pe」は状態性動詞に限らず、sat「乾く」、kemekar「縫う」、itese「ござ織りをする」といった非状態性動詞とも共起する例があり、「wa okay pe」は動作動詞は取らないということ以外には制約は無いようである。[10]

「状態性動詞＋hine an」については、例（64）（65）（66）のような用例がみられた。例（64）（65）は、物語中で自身の暮らしの様子を述べている場面である。例（66）は、物語冒頭、主人公が自分自身が何者であるかを述べている箇所である。

(64) sikkamuttek＝an　hine　mokor＝an　pokon
さっと目をつぶる　て　眠る＝4.S　～のように
ka　oka＝an　hine　oka＝an　awa
も　いる.PL＝4.S　て　いる.PL＝4.S　たところ
私はさっと目をつぶって、私は眠っているみたいにしていたところが＜lit. ?眠っているようにもいていたところが＞
（アイヌ民族博物館編2001：117）

(65) okkay　ne　po　tun　a＝kor
男　COP　息子　二人　4.A＝～を持つ
menoko　matnepo　tup　a＝kor　hine
女　娘　二人　4.A＝～を持つ　て
oka＝an
いる.PL＝4.S
息子をふたり娘をふたり授かって暮らしていました＜lit. 持っていました＞
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0071OS_34188A）

(66) ison　nispa　an＝ne　hine　oka＝an
狩りが上手い　長者　4.A＝COP　て　いる.PL＝4.S
狩りの上手な長者が私でした。
（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0014OS_34120A）

特に、例（66）のようにneを取るものは、例（60）（再掲）、（67）などのwa anの用例にも一定数見られる。

(60)（再掲）
anoka　anakne　nep　ka　kamuy　okay　pe
PRN　TOP　何　も　神　ある.PL　もの
ne　hike　ketupe　kamuy　a＝ne　wa
COP　だが　ケトゥペ　神　4.A＝COP　て
oka＝an　hine
いる.PL＝4.S　て
私は他でもないケトゥペ神なのだ。＜lit. *ケトゥペ神であってある＞
（トゥイタク3：33）

(67) hapo　ka　isam　mici　ka　isam　oar　ponpe
母　も　無い　父　も　無い　全く　赤子
an＝ne　wa　oka＝an　hike
4.A＝COP　て　いる.PL＝4.S　だが
母もなく、父もなく、私はとても小さい子供で、私たちは暮らしていたが
（AA研アイヌ語資料公開プロジェクト 織田ステノ「moyuk」）

このようなアスペクト的意味の見い出せない「ne wa an」「ne hine an」の用例は沙流・千歳方言においても複数例あり、ne単独で用いるのとどのような差異があるのかは不明である。推測の域を出ないが、「私は～であって、（そういう者として）存在している」というように、存在を客観的に捉えることで、物語の聞き手（物語中の台詞であればその台詞を聞く登場人物）に対する状況説明の機能を果たしているのかもしれない。

（10）非状態性動詞を取る際には、「～してあるもの」というように、wa okayのアスペクト的意味が顕著になる。

4　おわりに

本稿では、静内方言のkane an、wa an、hine anのアスペクト的な意味のあらわれ方について沙流・千歳方言と比較しつつ考察した。各方言における存在型アスペクト形式の基本的な意味範囲は、次の表のようにまとめられる。

表　沙流・千歳方言と静内方言における存在型アスペクト形式の基本的な意味範囲の比較

<table>
<tr><th></th><th>沙流・千歳</th><th>静内</th></tr>
<tr><td>kor an</td><td>動作継続
変化の進行過程
習慣的動作</td><td>（なし）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">kane an</td><td></td><td>動作継続
変化の進行過程
習慣的動作</td></tr>
<tr><td colspan="2">変化の結果継続
単なる状態、属性</td></tr>
<tr><td>wa an、hine an</td><td colspan="2">変化の結果継続
単なる状態</td></tr>
</table>

これまで静内方言のkane anの用法は沙流・千歳方言のkor anに相当するというのが定説であり、一方で、静内方言のkaneにも沙流方言のkaneの用法と共通する用例も先行研究で指摘されていたが、本稿において、静内方言のkane anが沙流・千歳方言のkane anにも相当する場合があることが複数例によって示された。

静内方言のwa anは沙流・千歳方言のwa an相当であることが既に明らかにされていたが、本稿では「状態性動詞＋wa an」の脱アスペクト的な用法が静内方言にもあることを指摘した。

hine anは静内方言ではアスペクト形式として取り上げられて来なかったが、本稿では静内方言のhine anがwa anとほぼ同様に変化の結果継続を表すこと、また、wa anの事例同様に脱アスペクト的な用法があることを指摘した。

今回は事例報告にとどまり考察が十分に行えなかった。また、統語的な環境についても検討することができなかったため、他方言との比較も含め、今後の課題としたい。

略号

1, 2, 4	1st , 2nd , 4th person ※	1人称、2人称、4人称　※
=	personal affix boundary	人称接辞境界
A	transitive subject or possessor	他動詞主語または所有者
COP	copular	コピュラ
FP	final particle	終助詞
ITR	iterative	反復
O	transitive object	他動詞目的語
PL	plural	複数
POL	polite	丁寧
PRN	personal pronoun	人称代名詞
Q	question	疑問
S	intransitive subject	自動詞主語
SG	singular	単数
TOP	topic	主題

謝辞

改稿にあたり二名の匿名査読者の方々よりご助言ご教示を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。なお、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「アイヌ語における存在型アスペクト形式の方言間の異同」（研究課題番号21K20005、研究代表者：吉川佳見）の助成を受けた。

参考文献

アイヌ民族博物館編 2001. 虎尾ハルの伝承　鳥. アイヌ民族博物館.

アイヌ民族博物館編 2015a. 上田トシの民話.1. アイヌ民族博物館.

アイヌ民族博物館編 2015b. 上田トシの民話 2. アイヌ民族博物館.

アイヌ無形文化伝承保存会編 1983. 人々の物語. アイヌ無形文化伝承保存会.

奥田統己 1995. アイヌ語静内方言の接続助詞. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 1：139-159. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

金田一京助 1993［1931］. アイヌ語学講義. 金田一京助全集 アイヌ語 I. 5：133-366. 三省堂.

佐藤知己 2002. アイヌ語千歳方言におけるkaneの用法. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 8：61-88. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

佐藤知己 2006. アイヌ語千歳方言のアスペクト―kor an、wa an を中心として. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 12：43-67. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

佐藤知己 2007a. アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照. 日本語学 26（3）：44-52. 明治書院.

佐藤知己 2007b. 再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて―特に完了を表す形式をめぐって―. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 13：1-14. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

静内郷土史研究会編 1985. 静内地方の伝承Ⅴ. 静内町教育委員会.

田村（福田）すず子 1960. アイヌ語沙流方言の助動詞―アイヌ語の助詞についての報告その１―. 季刊民族學研究 24（4）：343-354.

田村すず子 1972. アイヌ語沙流方言における≪…して…≫の表現. 國學院雑誌 73（11）：147-163. 國學院大學.

田村すず子 1988a. アイヌ語. 亀井孝，河野六郎，千野栄一編. 言語学大辞典 1：6-94. 三省堂.

田村すず子 1988b. アイヌ語音声資料5 ―二風谷の昔話と歌謡・神謡. 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 1997. アイヌ語音声資料10 ―川上まつ子さんの昔話と神謡. 早稲田大学語学教育研究所.

千葉大学編 2015a. アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業　第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書　1/3. 千葉大学.

千葉大学編 2015b. アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業　第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書　3/3. 千葉大学.

知里真志保 1973［1942］. アイヌ語法研究. 知里真志保著作集 3：457-586. 平凡社.

知里真志保 1974［1936］. アイヌ語法概説. 知里真志保著作集 4：3-197. 平凡社.

中川裕 1981. アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞. 言語学演習 '81：131-141, 東京大学文学部言語学研究室.

中川裕 1995. アイヌ語千歳方言辞典. 草風館.

平石清隆 2003. 沙流地方のウウェペケレ～上田としの伝承～.

北海道教育庁社会教育部文化課編 1988. アイヌ民話. 北海道教

育委員会.
北海道教育庁社会教育部文化課編 1998. トゥイタㇰ（昔語り）2. 北海道教育委員会.
北海道教育庁社会教育部文化課編 2000. トゥイタㇰ（昔語り）3. 北海道教育委員会.
北海道教育庁社会教育部文化課編 2002. トゥイタㇰ（昔語り）4. 北海道教育委員会.
吉川佳見 2021a. アイヌ語における存在型アスペクト形式. 千葉大学人文社会科学研究科博士論文.
吉川佳見 2021b. アイヌ語静内方言の kane an、wa an と状態性動詞との共起について. 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書：5-14. 千葉大学大学院人文公共学府.
Refsing, Kirsten.1986. The Ainu language : the morphology and syntax of the Shizunai dialect. Aarhus University Press.

ARTICLE

The Existential Aspectual Forms of the Shizunai Dialect of Ainu:
A Comparison with the Saru and Chitose Dialects

YOSHIKAWA Yoshimi

Ainu has no grammatical tense and the use of aspectual forms is not obligatory, but there are various forms that express aspectual meanings. The usage has been mainly described for the form "verb (phrase) + conjunctive particle + existential verb *an*" (plural *oka*), as it is often translated with the *-teiru*/*-tearu* form in Japanese. Yoshikawa (2021a) positioned this form as an "existential aspectual form" and described the usage of *kor an*, *wa an*, *kane an*, and *hine an* in the Saru and Chitose dialects. Yoshikawa (2021b) also conducted a preliminary survey of the usage of *kane an* and *wa an* in the Shizunai dialect.

This paper discusses the usage of the existential aspectual forms *kane an*, *wa an*, and *hine an* in the Shizunai dialect of Ainu with comparisons to the Saru and Chitose dialects, with reference to additional data from Yoshikawa (2021b). The results show that *kane an* in the Shizunai dialect is sometimes equivalent to *kane an* as well as *kor an* in the Saru and Chitose dialects. For *wa an* and *hine an*, non-aspectual usage was also found in the Shizunai dialect.

YOSHIKAWA Yoshimi : Ainu Culture Group, Ainu Culture Center, Hokkaido Museum